

2021
秀作

第54回「おかねの作文」コンクール

ひいおばあちゃんの三千元

秋田県・秋田大学教育文化学部附属中学校 2年 小島 日和

4歳の頃、私は京都に住むひいおばあちゃんに会いに行った。うすい灰色の髪の毛でしわだらけのひいおばあちゃんは幼い私にとってもすごく小さく見えたけれど、私の手を包んでくれた手は大きくてふわふわしていてすごくあたたかかった。会った時のことはほとんど記憶にないが、一つだけ鮮明に覚えていることがある。それはひいおばあちゃんからお財布をもらったことだ。深い藍色のがま口のお財布。青い宝石がうめこまれた金色の蝶ちょうの細工がついている。今にも動き出しそうなその蝶は少し傾いていて、少しはみ出たボンドからひいおばあちゃんが自らの手でつけてくれたことがわかった。何も特別なものではないのに、なぜか私はそのお財布に特別な重みを感じて、慎重に持ち帰った。

その後ひいおばあちゃんは104年もの生涯を終えて天国に旅立った。その頃の私はまだ「死」というものを完全に理解できたわけではなかったけれど、母に「もう会えないんだよ。」と教えてもらい、すごく寂しくて、悲しかった。一度しか会うことができなかった——話したいこと、聞きたいことまだいっぱいあるのに——まだ小さいからとお葬式に行ったのは母だけで、私は父と妹と3人で待っていた。あの時の言葉にできない悔しさは今でも忘れられない。

ひいおばあちゃんが亡くなって少しした頃、私は小学生になった。不安でいっぱいの学校生活。私はひいおばあちゃんからもらったお財布を一番の宝物を入れている鍵つきの棚に大切にしまい、勇気が欲しい時にぎゅっと胸に当てるようになった。友達とけんかした時、マラソン大会の前日、苦手な教科のテストがある日——泣き虫で心配性の私があのお財布にどれだけ力をもらったことだろう。私はふと、お財布を開けてみた。そこには千円札が3枚。今考えれば三千元なんて大きな額ではないけれど、お手伝い1回でおこづかい10円だった当時の私にはとんでもない大金だった。私はあわてて、お金が逃げないようにしっかりとお財布の口を閉じ、そっと棚にしまった。そして心の中で「ありが

とう」と小さくつぶやいた。

あとから母に聞いた話だが、韓国人のひいおばあちゃんは戦争で日本に逃げてきたまま自分の国に帰れなくなってしまい、「在日韓国人」として厳しい時代を生きぬいてきたという。たくさん苦勞の中で10人もの子どもを立派に育てあげ、多くの人にしたわれる存在になったひいおばあちゃん。それほどぶれない強さをもった人だったのだと思う。あの三千元は、そんなひいおばあちゃんが未知の可能性を秘めた私に未来への思いを託したエールだったのかもしれない。そう思うとひいおばあちゃんのやわらかな笑顔が思い出され、力がわいてくるような気がした。強さと優しさを併せ持ったひいおばあちゃんの血を引き継いでいることに誇りを持ち、直接感謝できなかった分エールに応えられるように精一杯生きようと誓った。

昨年の社会の授業で「お金は人々がそれに価値を見出すから成り立っている」と教わった。最初は物々交換から始まり、物と物のやり取りの一方が「貨幣」という形に少しずつ統一されていった。硬貨も紙幣も人々が価値を感じなければただの金属、紙切れにすぎない。そこに人々が共通の価値を見出すからこそ、今の経済は回っているのだ。でも私はひいおばあちゃんからもらった3枚の紙に一般的な価値である「三千元」以上の価値を感じた。ひいおばあちゃんの思いがたくさんつまった三千元。何度も何度も私に力をくれた三千元。たった三千元にひいおばあちゃんが生きてきた104年間のすべてがぎゅっとつまっているような気がする。でも、私にとっては特別な価値のあるお金でも、使ってしまうえば「三千元」という価値に決まってしまう。それはひいおばあちゃんからもらった三千元に限ったことではない。おこづかいもお年玉も、もらったお金にはいろいろな思いがつまっているのだ。安易にお金を使ってしまうえばそんな思いはすぐに踏みにじられて、金額という価値がついてしまう。なぜか軽く見てしまいがちなお金だからこそ、本当に必要か自分で判断し、大切に大切に使いたいと思った。

ひいおばあちゃん、まだどんな人になるか想像もつかないような私に三千元という形で大切なことを教えてくれてありがとう。いつも力をもらっているよ。まだまだ弱くてすぐにくじけてしまう私だけれど、いつかひいおばあちゃんのような強くて優しい人になれるように、もらった三千元をずっと大切にすね。

ひいおばあちゃんの思いに応えられるようにこれからも頑張るから、もう少し空から見守っていてね。大好きだよ。

